第4回　現代哲学ラボ
2016年9月23日（金）
早稲田大学戸山キャンパス36号館
382号室
「〈私〉と〈今〉を哲学する--無内包
の現実性とは？」

「この」と〈　〉
：現実性をつかまえるには
VER.0.9

森岡正博

早稲田大学人間科学部教授

永井の初発の問題提起（と森岡が思うもの）

- 「私という存在は、その存在のあり方において、すごく特殊じゃん？」ということを、「私」という言葉を使ってきちんと言うことができない。
  - Aさん「私という存在は、すごく特殊なんですよ～」
  - Bさん「私という存在は、すごく特殊なんですよ～」
  - ・・・　「・・・・・・・」（以下同様）
  - → 「なんだ、私という存在はぜんぜん特殊じゃないじゃん！」
- これを回避するために「「この私」という存在は、その存在のあり方において、すごく特殊だよ！」と言ったとしても、やはり同じ罠に落ちる。
  - Aさん「この私という存在は、すごく特殊なんですよ～」
  - Bさん「この私という存在は、すごく特殊なんですよ～」
  - ・・・　「・・・・・・・」（以下同様）
- このようにして、「ほんとうに言いたいことがどうしても言えなくなる」という仕組みがある。

- そこで、「宇宙の中で、この私だけが、ほんとうにほんとうに特殊なあり方で存在してるんだよ～～～～～～～！！」というときの私のことを示すための言葉として、永井は「〈私〉」というものを導入した。
  - 「〈私〉とは、世界が現実にそこから開けている唯一の原点のことである。すなわち、その目からだけ現実に世界が見えており、その体だけが殴られると現実に痛く、その人の悲しみだけが現実に直接的に悲しい・・・唯一の存在者、のことである。」（『存在と時間』239頁）
- ただし問題点は、この〈私〉が「誰のことか」を公共的に正しく指摘することができない。「〈私〉とは「固有人名」のことである」と言うと、公共的にはすべて誤りになる。
- にもかかわらず、みんなは、〈私〉がどれを指しているのかをそれぞれ知っている。

本書での展開

- 「〈私〉」の「〈　〉」の部分を、「現実（性）」として切り出した。
  - この「現実（性）」とは何かを、公共的に理解可能なやり方で言おうと苦闘したのが、本書である。
  - 「私が転んで痛い」ときに、なぜ私は「現実に」痛いのか？
  - 「痛い」と言うときと、「現実に痛い」と言うとき、後者によって何の具体的な情報も付け加えられていない（「現実性は無内包」）。
  - しかしそのかわりに、「現実に痛い」と言うとき、「痛い」ということのみが（今、私に）ほんとうに起きている、とでも言いたくなるような何かが示されている（これを「現実性」と呼ぶ）。その「何か」は、世界の内部にあるものではない。
- （森岡：実は、「現実性」は、こういう会場で口頭で言う方が簡単に言える）

- 「現実性」は、「これ性」でもある。
- 世界には、「これ性」がある。その「これ性」が、人称的次元で起きたときに、〈私〉の問いが生まれる。
- その「これ性」が、時間的次元で起きたときに、〈今〉の問いが生まれる。
  - ここにおいては、〈私〉と〈今〉は、同一の性質を持っている。
- しかしながら、違う面がある。これがすごく大事。
- 〈今〉の場合は、じっとしてても、「現実」が「動いていく」。〈私〉の場合は、「現実」は動かない。じゃあ、「現実が動いていく」とはどういうこと？　という問題が生じる。これが本書の後半のメインの話題。
  - マクタガートの時間論の批判的検討

- 〈今〉っていう現実が端的にあるのに、その〈今〉が動くという現実もある。これはどういうこと？？？
- 「端的な現実の現在」と「現実の動く現在」の両方が（矛盾的に）両立していることが、時間のツボ。
  - 端的な現在　→　現実的から可能的へと（広がる）
  - 動く現在　　→　可能的から現実的へと（動く）
- しかし、そもそも、端的な「〈　〉」がいったい何であるのかは、「ほんの少しも分からない」（p.324）。
  - なぜならそれは「本質的に類型化を拒絶しているから」（p.324）。

以上、森岡の目から見た本書の概要終わり

「この」と「〈　〉」: 現実性をつかまえるには

- 「独在的存在者は「この私」である」
  - 「では、その場合の「この私」とは、誰かね？　私だって「この私」と言えるんだがね？」
  - → 「この「この私」！！」 ・・・・・　無限後退
- しかし、不思議なことに、上記の問いに対して、「この私が、私である」と答えれば、無限後退はそこで止まる。
  - ただし、後半の「私」は、発話者のことをも意味するので、あいまいである。
  - そこで、「私」から、発話者の意味を消去したものを、〈私〉と呼ぶことにする。すると、
- ＊「この私が、〈私〉である」、となる。
  - では、この場合の「〈私〉」とは何であろうか？

- 「〈私〉」とは、「生きられている私」のことである。
- 「生きられている」とは、
  - 殴られたら痛いということ
  - 経験が動いているということ
  - 悲しみやよろこびそのものがあるということ
  - 身体的なあり方をしているということ
- ＊「この私が、生きられている私である」
  - 「生きられている私」＝「〈私〉」は、「この私」だけからは導出されない。
  - 「この私」と「〈私〉」は別概念である。

- ＊「この私が、生きられている私である」
- 「では、そう言うときの、「この私」とは、いったい「どの私」かね？」
  - それを確定指示する方法がある。それは・・・

「プギャー！！」による「この私」の確定指示
森岡正博『まんが哲学入門』（講談社現代新書 2013年） p.167

- 「プギャー！！」によって、「この私がどの私なのか」を、ひとつだけに絞って確定することができる。
  - したがって、無限後退しない。「プギャー！！」で止まる。
- 「プギャー！！」による確定指示を「d」で表わすことにしよう。（dが指さしに似てるので）。
- そして「生きられている」を「L」で表わすことにしよう。（LはLifeの略）。
- とすると、＊「この私が、生きられている私である」は、

＊「d私が、L私である」

となる。さらに、

＊「dが、Lである」

にまで引き上げられる。この命題が表現しているものこそが、「現実性」である。

- 日常言語に落とすと、「プギャーが生きられている」ということ、これが「現実性」である。
- 「プギャー」から「生きられている」は導出できないから、これはトートロジーではない。分析命題でもない。しいていえばアプリオリな総合判断？（検討中）

＊「dが、Lである」 ･･･ 完全現実性命題

- ＊「dが、Lである」 ・・・ 完全現実性命題
- このとき、
  - 「d」は「現実のありか（現実はどこなのか）」を指している
  - 「L」は「現実のありよう（現実はどんな形式なのか）」を言っている
    - Lは形式を述べているのであって、内包を述べているのではない。
- つまり、「プギャーという現実のありかが、生きられているという現実のありようをしている」。これが「現実性」である。

- これは「今」に対しても適用可能である。
- ＊「この今が、生きられている今である」
  - 「では、そう言うときの、「この今」とは、いったい「どの今」かね？」
  - （永井の言い方だと、「で、その動く現在は今はどこにいるんだい？」）
- （答え）「プギャー！！」
  - 時間の場合も、これで行けると私は思います。
- ＊「d今が、L今である」

「生きられている」への反論

- （1）「生きられている」私、今、・・・というのは、ベルクソン、フッサール、メルロポンティらの「生きられた身体」「生き生きとした現在」等々と同じでは。だとしたら、永井が言うところの、「現実性を忘却した哲学」になるのでは？
  - →　そうはならない。「dが、Lである」を、そのように捉えることが間違い。もし森岡の主張が「現実性とはLである」だとしたら、その批判は正しいかもしれない。しかし森岡はそう言ってない。「dが、Lである」と言っている。
- （2）なぜ、「生きられている」私なのか？　たとえば、「存在している」私、でもいいのでは？
  - よくない。なぜなら「存在している」にも、同じことが適用できるから（次スライド）。

- すなわち、「この存在が、生きられている存在である」と言うことができる。
  - それによって、存在についての「現実性」を言うことができる。
  - ＊「d存在が、L存在である」
  - しかし、じゃあ、「d存在」ではない「存在」があるということか？
  - →　（答え）　たとえば、「私の死後のこの世界の存在」というものは、「d存在」ではない「存在」だろう。なぜならそれは「プギャー！！」では指示できないから。
  - （ここで再び「この」が出現している点がたいへん面白い）
  - （「過去の世界の存在」「未来の世界の存在」でもいいような気がするけど、なんか微妙）

「驚き」から見た「現実性」

	現実性（有内包、相対的）	現実性（無内包、絶対的）	背景にある形而上学的問題
私	〈私〉が、安倍晋三でもなく、××でもなく、森岡正博であることへの驚き*	「この私」が「生きられている私」であることへの驚き	世界がなぜか人称的になっているということ
今	〈今〉が、紀元ゼロ年でもなく、紀元××年でもなく、2016年11月23日でることへの驚き**	「この今」が「生きられている今」であることへの驚き	世界がなぜか動く・流れるというふうになっているということ
存在	地上に海のまったくない世界ではなく、海のある世界が〈存在〉することへの驚き***	「この存在」が「生きられている存在」であることへの驚き	世界になにもないのではなく、なにかが存在するというふうになっていること

*は自他間、**は時刻間、***はパースペクティヴ間で否定が作動し得る。

「生きられている」をどう評価するのか？

- 「私」を「生きられている私」と言い換えたときに、実在としては何一つ世界に追加されていない。その意味で、「生きられている」は永井の言う「無内包」である。
  - もちろん「生きられている私」という言葉を聞いたときに、さらに「現に生きられている私」と言いたくなるかもしれない。しかし「生きられている私」と「現に生きられている私」の差異はどこにもないのであるから、「生きられている私」だけで打ち止めにしてよい。
- じゃあ、別に「生きられている私」とわざわざ言わなくても、「現実の私」と言うだけでいいじゃないのか？
  - 「この私が、現実の私」、でいいのではないか？
- いや、それだと、森岡の言いたいことが言えてないように思う！！

- 「この私が、現実の私」という形だと、

（1）「この私が、現実の私」という状況は永遠の昔から成立していたわけではない

（2）「この私が、現実の私」という状況全体がいずれ消滅する（閉じる）だろう（死によって）

・・・・ということが問えなくなるように思う。

  - というか、その二つは、「現実性」に対して、影響をまったく与えることがない、ということになるだろう。私の生に限りがあろうが、私の生が不滅であろうが、それは「現実性」にとって無関係であるとするのが永井的な「現実性」であると森岡は思う。

- 「この私が、生きられている私」、というふうに押さえることによって私の誕生と死が必然的に視野に入ってくる、そしてそれとの関係において「現実性」を問うことになる。と森岡は予想する。

- 「生きられている」ことが成立している圏域内で「無内包の現実（性）」は語られ得る。
- 「生きられている」圏域外では「無内包の現実（性）」は語られ得ない。
  - たとえば、ビッグバンのちょっとあとの宇宙における「無内包の現実（性）」は語り得るのか？　無理だろう。
- 「無内包の現実（性）」は、「生きられている」ことの手のひらの外には出られない。
- 仮説：「プギャー性」と「生きられている性」の上で、「無内包の現実（性）」は成り立つ。
  - ただし、このような「無内包の現実（性）」は、永井の構想しているものとは、すでに別物になっているのではないか。

- 永井の、「端的な現実の現在」と「現実の動く現在」について言えば、現実性の次元において「動く」のは「現在」ではなくて、「生きられている」ことではないかというのが私の直観。現実性の次元においては、「生きられている」ことが「動いて」いる。
- だから、「動く」には2種類あって、「生きられている」次元で「動いている」ことと、時間の流れの次元で「動いている」ことがある。マクタガートが議論しているのは後者。現実性の議論が捕まえてしまうのは、前者。
- 「生きられている」とは、前者の意味で、つまり時間の流れという次元とは別の次元で「動く」ことである。
  - 「生きられている」の「動き」は、時間とは関係ないのではないのか？　ヘラクレイトス性の優位？　「現在」と「いま」（『まんが哲学入門』）
  - このへんのことは、まだうまく言えないので、時間をください。なんとかします。

- 要するに、森岡は、現実論を、生命論に持って行きたいのだ。
- いまのところ、このへんまで考えています。
- まだあちこちに間違いがあると思います。
- きっと思考の進展があるはずなので、2017年3月刊行の『現代生命哲学研究』（ウェブ学術誌、大阪府立大学）に論文として刊行します。

次スライド：永井さんへの質問

永井さんへの質問

- （1）200年後（ここにいる全員は存在していない）、「現実性」について正しいことが語られ得ますか？
- （2）「現実の動く現在」は、200年後（ここにいる全員は存在していない）まで動きますか？
- （3）【「プギャーという現実のありかが、生きられているという現実のありようをしている」。これが「現実性」である。】 という考え方をどう思いますか？

森岡正博のスライド終わり

現実の現実性と時間の動性

—永井均著『存在と時間　哲学探究1』（文藝春秋、2016）へのコメント—

入不二基義（青山学院大学）

二つの質問

（赤字部分は賛同部分・共有する前提）

- １．　無内包の現実は、〈私〉や〈今〉に残る「中心性」「偏在性」も消え去り、遍在的なものになるのではないか？つまり、徹底された無内包の現実は、〈私〉や〈今〉ではなく、〈　〉なのではないか？

- ２．時間経過は特殊な変化であるが、「動く今」と同一視できるだろうか？「動く今」を時間経過とみなそうとしても、時間経過ではない時間跳躍になるのではないか？

全体の構成

- I.　現実の現実性
  - 現実の現実性を〈私〉や〈今〉から引き離す
  - 無内包に、無様相・無人称・無時制・遍在を追加
- II.　時間の動性
  - 時間の経過を、〈今〉の移動から引き離す
  - 時間の経過を、「潜在的な絶対変化」と考える

〈私〉や〈今〉

- 「この私」「この今」「これ」「このこれ」「端的な現実の私（現在）」「この現実の今」「これが私だ」「これが今だ」「これとして在るにすぎない純粋な私」･･･
- 「これ（この）」:　中心指向性（収斂）用法
  - cf. ウィトゲンシュタイン『哲学探究』§253の「自分の胸の辺りを叩くジェスチャー」
  - 私秘性（≠独在性）の場面にも共通
- 「これ（この）」:　全域指向性（発散）用法
  - cf. 「周囲（世界）を丸ごと両手で抱えるかのように円を描く仕草」
  - 「この世界」「この宇宙」「この現実全体」･･･

「この現実」

- 中心指向（収斂）的な現実
  - ＝　中心（私・今）を有する現実
  - ＝　対比（中心／周辺）が残る現実
  - ＝　（人称・時制・様相としての）内包性が残存
- 全域指向（発散）的な現実
  - ＝　遍在的な現実
  - ＝　対比を消し去る現実
  - ＝　（人称なし・時制なし・様相なしの）無内包

有内包・脱内包・無内包：現実version

- （１）「私の現実・現在の現実・世界の現実」
  - ：　有内包
- （２）「現実の私・現実の現在・現実の世界」
  - ：　脱内包　・・・〈私〉〈今〉
- （３）「現実の現実性」それ自体
  - ：　無内包　・・・遍在的な現実

累進構造

図1

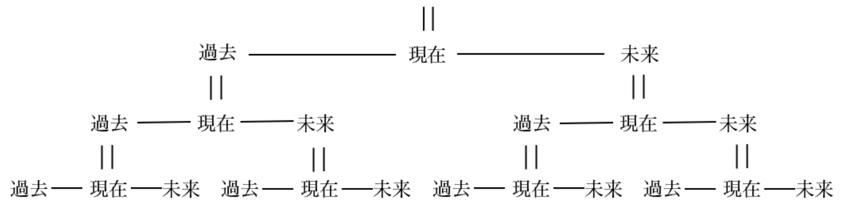
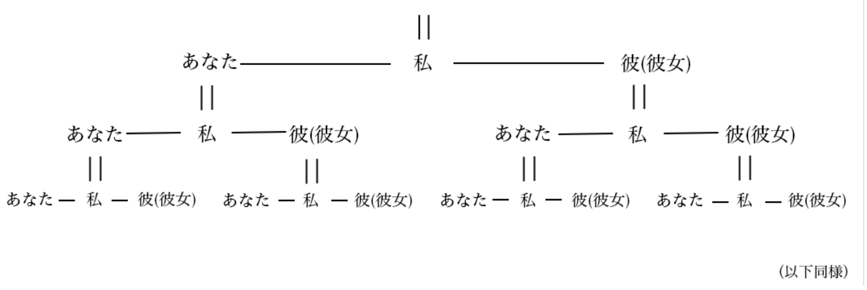
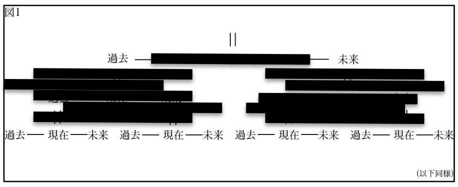


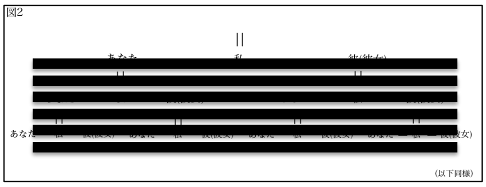
図2



累進構造図への上書き (1)

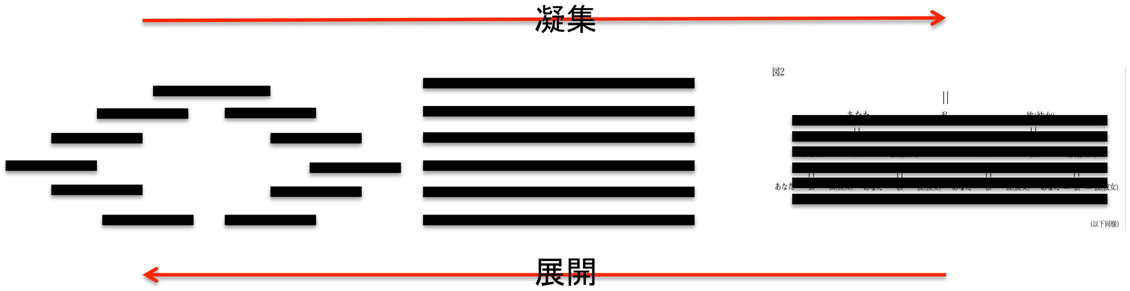
- (1)最上段:　現実の現在・過去・未来
  - 横一線全体が丸ごとの現実性＝横線の無差別の全体が現実(区分・中心なし)＝遍在的な現実
- (2)上段・下段:　縦関係への横線性の伝播
  - 「横一線全体丸ごとの現実性」の伝播
  - 「遍在的な現実」の伝播





累進構造図への上書き (2)
「蛇腹的な開閉」運動

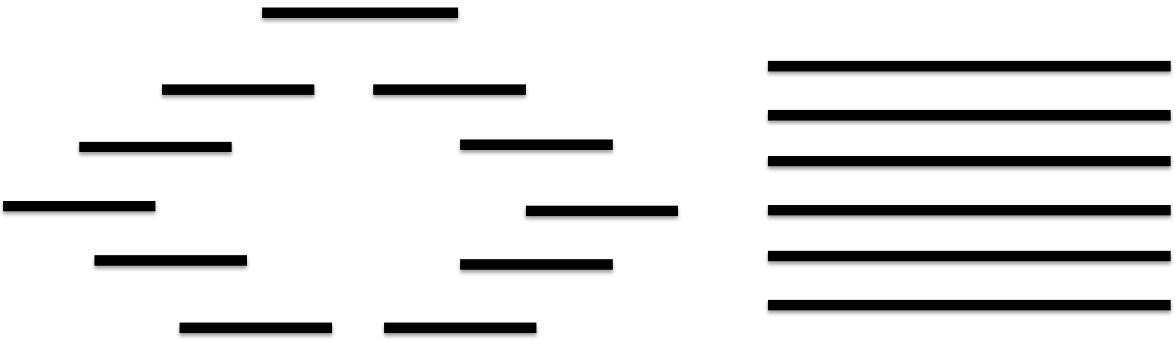
- （１）「開」:　累進（展開）
  - 縦の関係の多段化（元の累進構造図）
- （２）「閉」:　収縮（凝集）
  - 横線の無差別な遍在性への潰れ（上書き図）

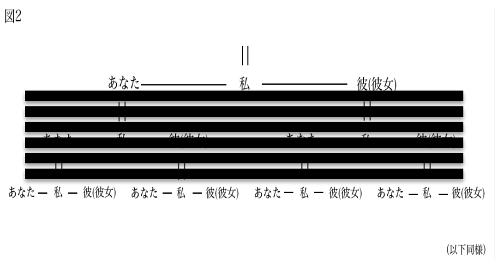


- 「絶対主義 VS 相対主義」「現実主義　VS　可能主義」

≠ 「開（構造の展開）　VS　閉（構造の潰れ）」

蛇腹的な開閉運動





全体の構成

- **I.　現実の現実性**
  - 現実の現実性を〈私〉や〈今〉から引き離す
  - 無内包に、無様相・無人称・無時制・遍在を追加
- **II.　時間の動性**
  - 時間の経過を、〈今〉の移動から引き離す
  - 時間の経過を、「潜在的な絶対変化」と考える

〈今〉の移動

- ≠ものの移動・ふつうの変化　（時間の経過は「特殊な変化」）
- 現在（今）は、端的な現実性（この性）を持つ
  - 持つだけ・ただ持つ　→　「変化」「動き」と無関係
  - 持って失う、持たないが持つようになる　→　喪失（消失）と獲得（出現）による「変化」「動き」

- 「そうだとすると時間は、ただこれしかない（自余のすべてはその内部にある）はずのものが、次々と連接して―という意味で「これしかなさ」が次々と消されて―存在する、というきわめて特殊な、動的な矛盾を孕んだあり方で存在していることになるだろう。」（pp.262-263、下線は引用者）
- 「つまり、それはある特定の時点でしか（その一回しか）実現されず、しかもそのときには必ず実現されねばならない、」（p.293、下線は引用者）

一回だけの実現（の反復・連接）

- 「現実の今になる／現実の今ではなくなる」の繰り返しとしての「時間の経過」
- ＝ 「各時点での現実性の点滅・生滅」
- ＝ 「不連続的なジャンプ」「瞬間的な跳躍」
- → 「時間の経過」には不十分なのでは？

- cf. 電光掲示板における独立の各電灯による不連続な点滅が、連続的な文字移動のように見えてしまう

不連続な点滅と連続的な文字移動

「特殊な変化」としての時間の経過

- 他のふつうの変化（状態変化や位置移動等）の背景として潜在するのみで、けっして前景化しえない変化
  - （1） 表象不可能性（表象における寄生性）
  - （2） 潜在進行上の優先性・独立性
- 「潜在的な絶対変化」としての時間の経過

有内包・脱内包・無内包：時間version

- (1)（ものの移動のように）今が動く： 有内包
- (2)（現実性の獲得／喪失で）今が現に動く：脱内包
- (3)（潜在的な絶対変化としての）時間の経過：無内包

- (1) 文字盤と針の動き
- (2) 今見る
- (3)「今見ていてもいなくても、そもそも見えていないとしても」・・・のすべてを無差別に貫く（無中心で遍在的な）背景変化

無内包の時間変化

- 【その比喩的な表象（表象不可能なものの表象）】
  – 無内包の現実を表象する太い横線（むしろ平面）を満たしている黒インク（ベタ）が、いっさいの偏りなく（もちろん特異点もなく）流れ去っていて、線（面）の形も危うくする、つまり不定形のインクの流動のほうが全面的で、局所で線や面という図形らしきものが一時的に出現しているというイメージ

パルメニデス的世界像とヘラクレイトス世界像

- 永井：　時間における矛盾（端的なこの現在と端的なこの動く現在）
  - 「つまり、時間の場合には二種類の端的な現実性があるのだ。端的なこの現在と端的なこの動く現在の二種である。それぞれを、パルメニデス的世界像とヘラクレイトス的世界像と呼ぶこともできる」（p.258）
- 入不二：「現実の現実性」自体と「時間の動性（時間経過）」との間の一体性と矛盾
  - 一体性：　無内包の遍在態として一体
  - 矛盾：　　静態と動態